

長野 竹軒  
草書千字文（懐素）  
⑫



歳呂調陽



長野 竹軒

草書千字文（懐素）  
⑫

### 〈解説〉

先月号の解説で本古典は、「格調が高い」とお伝えしましたが、その原点は線質の良さにあります。それは、他の草書古典には見られない「線質の深さ」や「しなやかさ」にあります。具体的には筆を紙面に置く際に穂先を露骨に出さない点が格調の高い表現に繋がっています。今月号でこの古典は最後になりますが、これからもこの格調高い古典を是非継続して学習して欲しいと思います。

### 〈學習上の留意点〉

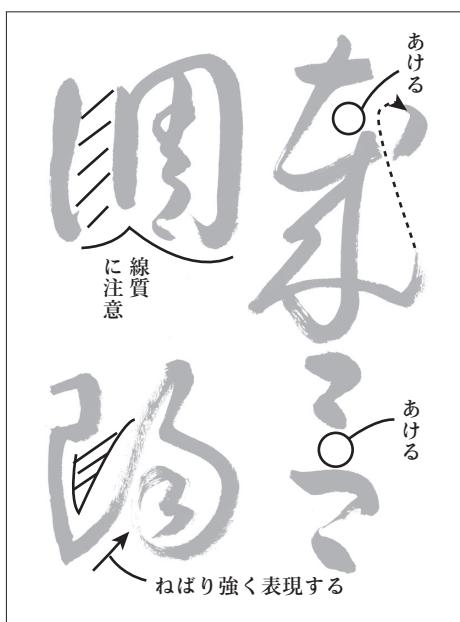
今月号は半紙の四文字課題ですが、一、二文字目の大小や、三、四文字目の大きさと位置に注意して臨書しましょう。この古典の学習目標である、安定した線質と格調の高さに留意して表現しましょう。

「歳」…文字の大きさに留意。

「呂」…省略の表現に着目する。

「調」…安定感や線質の深さに注意。

「陽」…線質の「粘り」を意識して表現する。



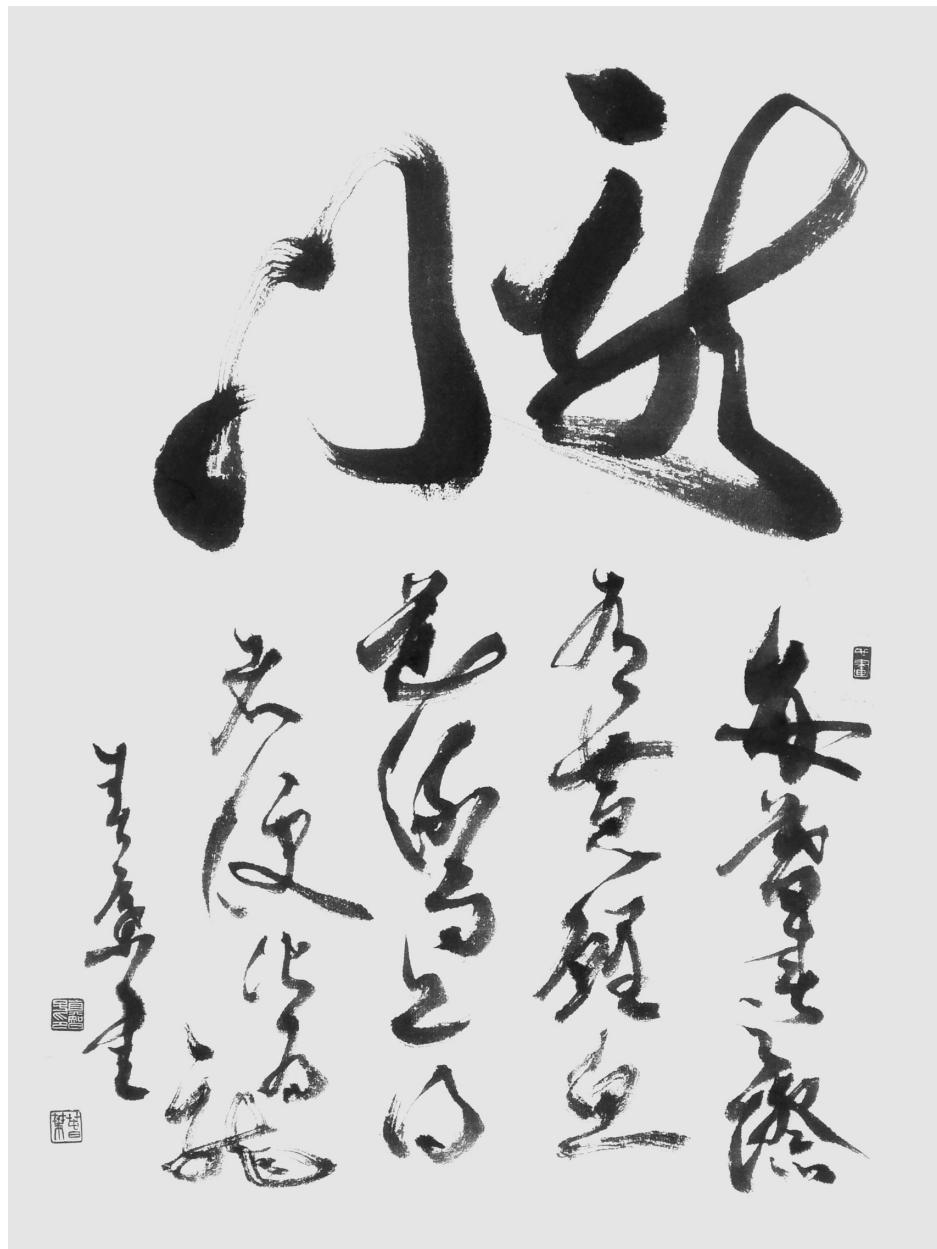
線質  
に注意



あける



ねばり強く表現する



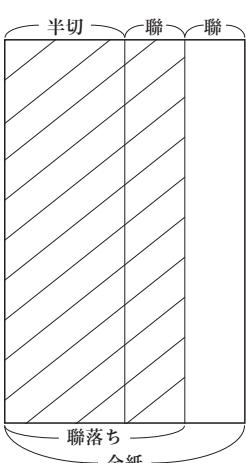
## 解説

五月になると、我が家はささやかな床の間に掛けられた黄色の鯉が滝を上る軸を見ながら、幼い私は二つの疑問を抱いた。どうして魚が滝を上れるのだろう、どうして鯉のぼりの鯉は黒と赤なのにこの絵の鯉は黄色いのだろうかと。長じて「登龍門」の逸話を知つて前者は納得したが、後者についてはすっかり忘れてしまっていた。令和甲辰正月、「龍門」と書きたくなつて出合つたこの漢文が、黄鯉のいわれを教えてくれた。人の手で交配された黄色の錦鯉ではなく、あの大黄河を遡上して龍門に挑んだ逞しき生命力に溢れる天然の黄鯉達を私なりにイメージして筆を走らせた。

## 留意点

- ・使用する筆や用紙の特質を活かして、細部にあまり拘わらず書く。
- ・行脈を左に流さずに書くほうが、紙面を構成しやすい。
- ・隣り合う行のバランス（文字の大小・太細・墨継ぎの位置・運筆の緩急など）に留意する。
- ・好きな古典を数日眺めてから取り組むのも一案かと思う（範例は「顏真卿大字典」と眞卿の行書類）。

小画仙紙全判



全紙  
半切  
聯落ち  
聯  
よこ たて  
約70cm×135cm  
約35cm×135cm  
約52.5cm×135cm  
約17.5cm×135cm

## 〈釈文〉

「龍門」

每暮春之際 有黃鯉魚逆流而上

〈読み〉每暮春の際 黄の鯉魚流れに逆いて上  
る有り 得し者は便化して龍とな  
る。 得者便化為龍

〈意味〉毎年、春の終わりになると黄色の鯉が遡上してきて龍門（激流の滝）に挑む。

上りきれた鯉は龍になったという。

〈出典〉「三秦記」（『太平廣記』龍門の項）

〈提出用紙〉 a 半切以内（縦使い・範例は $\frac{1}{3}$ ）  
b 聯落ち $\frac{1}{2}$ （縦使い）

a・b共に書体自由